

# Meet Executive

~Interview with Mr. Halliwell, Director of SES Astra~  
(September 12, 2001)

通信総合研究所理事長 飯田尚志  
(スペース・ジャパン・レビュー編集委員)



世界遺産となっているルクセンブルグ市内風景

—あの 2001 年 9 月 11 日の米国同時多発テロ事件が発生した翌日の 9 月 12 日、ルクセンブルグにある SES アストラ社に同社通信技術部長のハリウェル氏にインタビューすることができた。ハリウェル氏には SES アストラ社の技術戦略やこれからの衛星通信サービスについて語って頂いた。

マーチン・ハリウェル氏

(Mr. Martin Halliwell)

SES 通信技術部長，経営委員会委員  
(Director of Communications Technology)  
(Member of the Management Committee)  
(Societe Europeenne des Satellites)



1987 年 11 月 SES 入社

#### 前職

- SES グローバルマルチメディアネットワーク統括部長
- SES マルチメディア技術部長
- SES 運用課長
- SES ネットワーク運用課長

#### 学歴

- C & W (Cable and Wireless) 社通信・電子上級コース修了
- ロンドンオープン大学数学および機械工学学士，外部環境および戦略経営修士

#### その他

- 1959 年 4 月 20 日生まれ，国籍：英国
- 一女の父
- 趣味：電子ベースギター，オートバイレース，フットボール，読書



SES アストラ正面入口

--本日はお忙しい中、**SES** アストラの施設の見学をさせて頂き、またスペース・ジャパン・レビューのインタビューに応じて頂きありがとうございます。

どうぞ致しまして。私どもの会社を訪問して下さい大変光栄に思っております。

--さっそくですが、昨日のあの言葉に表せないほどの米国に対する同時多発テロで、通信衛星の需要が増えていると思うのですが、**SES** アストラ関係ではいかがですか。また、そのような需要を十分満たしていけるのでしょうか？

過去何年も **SES** アストラでは、いくつかのトランスポンダを戦略的に保持することにしております。このお陰で、現在のあるいは新しい顧客からの予期せぬ御要求に迅速に対処できるわけです。

しかし、ご存知のように、我々が扱っているトラヒックの多くは放送およびマルチキャスト関連の **DTH (Direct to Home)**、アナログとデジタル **TV** に対するケーブル配信、ラジオおよびマルチメディアサービスとなっています。このため、特に米国の事件に関係したような大きな需要の増加はないのではないかと思います。

そうは言っても、ニュース需要 (**SNG (Satellite News Gathering)**) とか臨時の使用などは増加するでしょうから、**SES** では、このような市場でいかに競争力のあるサービスを提供することができるか現在検討しているところです。傾斜軌道にある我々の最初の衛星 (**Astra 1A**) を **SNG** 型の活動のためにポイント・ポイントの低価格サービスに使うことができるかどうか検討しているところです。

--**SES** アストラは世界的にいても極めて成功している会社だと思います。よろしければどんな事業をどのくらいの規模でおやりになっているなど、事業規模をご紹介頂けるでしょうか。

それは大変名誉なことだと思います！**SES** は **1985** 年の創業以来非常な成功を享受しております。最近では、**23** か国から約 **370** 人を雇用しています。我々の

技術的、商業的な活動の多くは、ルクセンブルグのベツドルフ (Betzdorf) に集中しています。

我々のビジネスの柱は、全ヨーロッパを対象とした TV, ラジオ, マルチメディアサービスの伝送です。また、最近、DTH を通じておよそ 3178 万の家庭、またケーブル配信を通じて 5725 万の家庭にアクセスしています。それで、SES アストラはヨーロッパ中のおよそ 3 億 5600 万人にテレビサービスを提供しているといわれています。現在、全部で 650TV チャンネル (アナログ 65, デジタル 595), 400 ラジオチャンネル, 200 データサービスを送信しています。

2000 年の主な営業結果は、SES グループ全体では、収入 8 億 3590 万ユーロでした。全体の収益は 2 億 4450 万ユーロで、EBITDA (Earning Before Interest, Taxes, Depreciation and Amortization : 金利・税金・償却前利益) 余裕は 84.8% となっています。

--なぜ SES アストラはそのような成功を収めたのか、知りたい人がたくさんいます。成功の秘訣を少し教えて下さい。

当社が成功するには 1 つの理由というわけではないので、答えるのに難しい質問ですね。むしろ、当社が成功したのは、技術的、営業的、政策的なことの組み合わせの結果だと思います。主な点を挙げるとすれば、欧州委員会の「緑書」(政府試案を述べた討議資料) に提案し、それに続いて、国境を越えてヨーロッパ中にテレビ放送を行うという方針があったと思います。これが創業原理を形成しました。

技術的な観点からは、汎ヨーロッパ的に 60cm 径の受信アンテナを使って固定通信周波数帯を使って 16 チャンネルの中電力衛星を運用するという決定は各国が運用する 5 チャンネルの放送業務衛星よりずっと商業的な魅力がありました。



ハリウェル氏及び担当部長と旧デューク伯館サイトにて  
(右から Halliwell 氏, 筆者, 担当部長の Ashford 氏, Duplay 氏, Lothian 氏)

PAL サービスを行うという決定は、適当な復号器の集積回路の供給の遅れから競合する DMAC 受信機がまだ得られないときに低価格受信機の製造開始を促しました。

サービスが拡大したときには、余分の宇宙部分の追加は同一軌道位置に複数の衛星を配置することによって達成されました。これは SES アストラにとってもうひとつの大きな差別化でした。これは設置済の受信人口が分裂するのを最小とすると同時に、宇宙部分の開発が可能になりました。今日、我々は東経 19.2 度の位置に 7 つの衛星と東経 28.2 度に 3 つの衛星を配置しています。

より営業的な観点からは、最初、すべての言語で主題を表すために、調和のとれた番組群を提供するという努力を重ね、その努力は、それに続くデジタル番組編成におけるより複雑な言葉の導入へと組み合わさりました。このことは、SES アストラがもっとも価値のある軌道位置を有することになりました。

--企業の成長には新しいサービスの開発、またそれには新しい技術開発が伴うものだと思いますが、どのようにして達成されているのでしょうか？

SES には幸運にもあなたがいう開発を行うために多くの熟練した専門家がおります。一般には、我々のすべての開発が事業要求に直接関係していることを確実にしようとしています。ですから、技術部門はどんな努力も無駄にならないように営業部門と密接に仕事をしています。

我々は現在いくつかの分野の開発を行っています。例えば、データ端末の開発、オンボード処理ペイロード、周波数再利用マルチビーム衛星などです。私どもは内部の力も使いますし、ESA（ヨーロッパ宇宙機関）の特定のプログラムと共同作業をすることもあります。

--最近、Ka バンドの双方向サービスが話題となっていますが、貴社のお考えはどうでしょうか？

1年から1年半前、SES はパイオニア（Pioneer）という名前で Ka-Ka のマルチビーム衛星システムに関し、メーカーに RFP を発出しました。最近このプロジェクトは凍結していますが、関連するビジネスプランの開発は続けています。

ご存じのように、そのようなシステムは大変多額の投資が必要ですし、率直に申し上げて、そのような支出を株主に納得させるのは困難だと思います。しかし、やがて、この型の技術は限定した OBP（On-Board Processing）機能と組み合わせた次世代のシステムの一部を形成するものと信じています。しかし、申し上げたとおり、その設計は通信要求を刺激し、経済的な成功機運が熟すのを待っている多くの他のことと同様に事業機会を反映したものでなければなりません。

--新しいマルチビームアンテナが建設中のようですが、SES アストラはそのような新しい技術を導入されるのですか？

はい、そのとおりです。しかし、SES は通常は全く新規な技術は開拓しないというような保守的な機関です。むしろできるだけ容易に衛星バスとペイロードを維持し、故障確率を減少させるよう努力しています。そこで、マルチビーム能動アレー技術の採用を注意深く検討しているところです。

--ヨーロッパだけでなく、アジア、米国に進出されていますが、地理的な拡大の戦略は何でしょうか？



ハリウェル氏と建設中のマルチビームアンテナサイトにて

GE Americom の買収の完了をもって、SES は内部の相乗効果の獲得に注力しようとしています。そして再び、我々は外部の機会を窺うでしょう。現在は、それがどこにあるか示すには時期尚早だと思います。

--将来、SES アストラが提供する新しい衛星のアプリケーションはどのようなものでしょうか？

このことは一般に私どもの顧客によってもたらされるものです。しかし、我々が変化すると見る分野は次のものです。

- より高次な変調方式の導入
- 従来の MPEG-2 サービスに変わる IP-TV サービスの導入
- 受信機の蓄積デバイスを利用する VoD サービスの導入
- Ku-Ka のマルチメディア双方向サービスの拡大
- ポイント・ツー・ポイントサービスの導入
- 臨時使用および SNG サービスの導入
- 衛星放送事業者に対して世界的な「ワンストップショップ」サービスの導入

そして、これらの変化は正に 2002 年に対して起こるものです!!!

--最後に、衛星通信分野における ESA のような政府または公共の機関の役割は何なのでしょう？

我々は、今日 ESA と広範囲の目的を有する 7つのプロジェクトで協力しており、活発な関係を有しています。

--本日はどうもありがとうございました。

どう致しまして。さようなら。



遠景より見た農場に囲まれた SES アストラのアンテナ群



(謝辞) 本インタビューは **SES** アストラ社担当部長 **Edward W. Ashford** 氏の招きで同社を訪問したことから実現したものであり、この場を借りて **Ashford** 氏に深謝します。